七戸町立鷹山宇一記念美術館

第5号(平成8年4月15日)

SUPORTERS CLUB NEWS

友の会 会報

TAKAYAMA-UICHI MEMORIAL MUSEUM OF ART

〒039-25
青森県上北郡七戸町字荒熊内67-94
七戸町立鷹山宇一記念美術館内
鷹山宇一記念美術館友の会
TEL 0176-62-5858 FAX 62-5860

第2回研修旅行を実施

北海道立函館美術館他

美術館友の会の第2回目の研修旅行が三月十六日函館市で実施されました。

早朝七戸町公民館をバスで出発しJR津軽海峡線で青函トンネルを通過して、北海道立函館美術館の特別企画展「現代日本版画の一断面」他を見学し夜遅く町に戻るという強行スケジュールでしたが、天気にも恵まれ特別企画展やセミナー等に参加する機会もあり充実した研修となりました。

はずれの記

道立函館美術館を訪ねて

福田幸男

天気予報は晴れとあったが、昨夜来の雨の名残が時々ぽつりと顔に当たる。七時十分前、公民館では既に学芸員の大池さんが二三人の方に集金を始めている。十和田市からの参加者もあり挨拶がはずむ。十分程遅れて発車。

早速オリエンテーションで友の会会長さんの挨拶があり、初めて今日の見学の主目的が「現代版画展」であることを知る。

バスがみちのく有料道路に入るとルーブル美術館についての研修ビデオが映される。美術館見学の導入としては心憎い配慮である。しばし、十三年程前に三時間程慌ただしく垣間見た同館の回想に浸った。

トンネルを抜けると津軽は快晴である。出来立ての弁当を貰い列車に乗り込む。弁当は「肉の寺山」製。青森を離れて八年ぶりに味わう砂糖味の濃い懐かしい味である。当時の友人達の顔も浮かぶ。

食事も済んで俳句の種捜しでもと窓の外へ目を向けた途端、会長の山本さんから「今回の研修の感想文を書いてくれ」と言われてびっくり。初参加の、それも美術は全くの苦手で、それを口実に、変わった土地で一句でも俳句をという不埒者に天罰覿面である。

さて前置きが長くなり過ぎたが、函館駅から各自でタクシーを拾い美術館に到着。館内見学の説明後、鑑賞に入ったが、版画イコール棟方志功的な貧困な知識しかない者には具体物が表示されないもの、色彩の変化による意志表現、写真製版としか見えないものなど「絵師・彫師・摺師」という浮世絵時代からの版画の原点からみれば、只々難解極まりないものとしか言いようが無く、一緒においでになった先輩の方々が二三人ずつで話し合いながら鑑賞しているのを畏敬の目で眺めるだけであった。

一巡して、運転免許証に挟んであった志功記念館の今年の会員証「彼岸団子ま白き炉辺や西津軽」（竹内俊吉句）志功作「三月彼岸の柵」を見、緊張から解放されたというのが正直な感想である。ただ、午後二時からのセミナーでは、初心者にも大変解りやすい解説で、出来上がった物が一枚しか無いとか、コンピューターを活用した作画など、色々な技法についての説明もあり、今後この種の鑑賞をする上で、鑑賞者の意識改革をさせられた思いであった。先にこのセミナーが聞ければより研修の効果が上がったものと思われる。

特別展示観賞後、セミナーまでの間に、近代詩文書の第一人者である金子鷗亭の書に接する事が出来たのは思いがけない喜びであった。また、美術館ロビーの天井の造形も、写真に興味がある者にとっては大変良い被写体でフォト七戸の石田さんとともに何枚か撮影できたのも良い思い出になると思う。

自由解散後、向いにある北洋資料館を見学したが北洋航海体験室はここだけしかないものだし、他の資料も八百余点と数が多く時間をかけて勉強する機会を得たいものであった。

函館駅構内では、乗車の直前に三十点程の写真の秀作展を見つけ、石田さんから佳作・秀逸・優秀作品の鑑賞の着眼点について教示をいただいた。これも今後に生かせると思う。

五時二十分、それまで快晴であった函館の太陽も雲に隠れて白光を放つなか、我が研修員を乗せた快速「海峡十四号」は定刻帰路についたのであった。

思えば、雨と雪とに挟まれた快晴の一日であった。山本会長さんをはじめ大池さん盛田先生などの精進によりこのような充実した一日を持てたことを感謝しつ

つはずれの記を終わりたい。

今年は、お隣岩手県の生んだ石川啄木生誕百十周年宮沢賢治生誕百年にあたりこれにちなんだ色々の催しがあると伺いました。何か計画があるでしょうか？あれば、ぜひ参加したい。

（友の会会員）

北海道立函館美術館

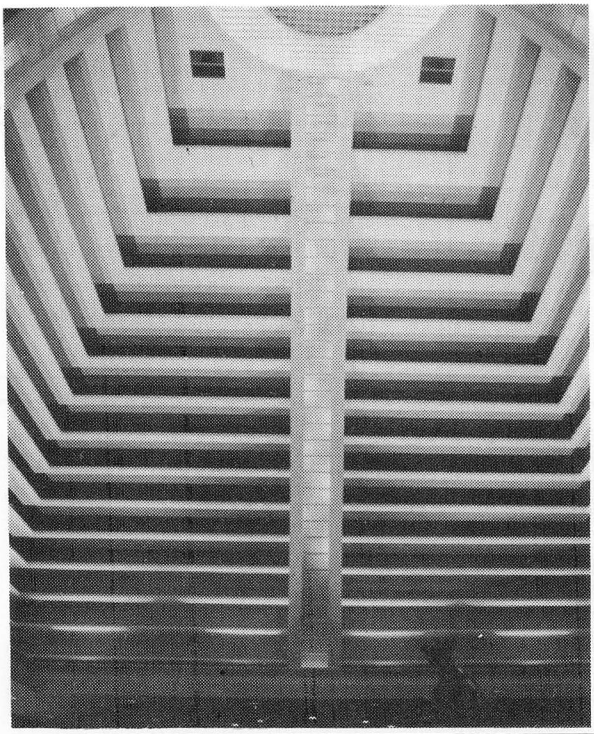
函館市の五稜郭公園に隣接して、一九八六年に開館した南北海道地区の美術活動の拠点施設。

地域にねざした美術品の収集とともに現代美術やヨーロッパの近代彫刻のコレクションも充実している。

また、金子鷗亭記念室では日本・中国・朝鮮の書・絵画・陶磁器などの東洋美術に触れることができる。

今回の「現代日本版画の一断面」展は、北海道立近代美術館収蔵の十一人の作家の作品を体系的に紹介している。昨年県立郷土館で開催された「青森県近代版画のあゆみ」展の図録などを参考にすると一層興味深い鑑賞ができる。

同館の情報は（〇一三八）五六・六三一一まで



写真右　階層的造形が特徴の美術館内部

館長日誌より（三月十五日）

春季二科展（銀座松屋）表敬訪問
北川フラムさんの受賞パーティ
鷹山宇一先生ご自宅訪問

去る三月十五日、当館の佐藤亘館長・濱中常務理事他関係者が上京し、社団法人二科会の春季展を表敬訪問すると同時に、四月二十八日からの当館での二科展開催の準備等について協議いたしました。

また同時に、スペイン民芸資料館の建設等で大変お世話になっておりますアートディレクターの北川フラム氏の受賞パーティにも出席いたしました。

そのレポートをお届けいたします。

春季二科展大賑わい

金曜日というのに大渋滞にぶつかり、いつもは二十分で行くところを、一時間半もかかり、ようよう銀座松屋七階の会場に着きました。

まずは二科会事務局の鷹山ひばりさんから天野さん、大隈さん、西野さん方詰めて居られた画家の方々をご紹介いただき、去年の七戸行きに話が咲いたり、今年へ更に期待がふくらみ、歓迎の気持ちを申し上げて、展覧会を覗かせていただきました。

混雑する観覧者の間を縫って、昨年よりも更に一段と印象深い作品の多いのを感じながらお別れしました。

北川フラムさん受賞パーティ

午後からの雨足が更にしげくなって、夜は土砂降り。

今夜は、しかし、いよいよ、渋谷のアート・フロント・ギャラリーでの、「北川フラムさんを励ます会」への出席です。

フラムさんは「ファーレ立川」のアートプランナーとして

☆日本都市計画学会賞
☆日本建築美術工芸協会賞

という素晴らしい賞を受賞されたのです。

司会は、女優の真野響子さん。着物姿も艶やかに、例の少し鼻にかかったソフトな語りで、並み居る中年から老年の心を虜に致しました。まことに憎い演出です。そして、スピーチ・スピーチ・スピーチ、その中に、当館の青山浄晃理事の軽やかな話術が生きました。青山さんは、東京の仕事場から駆けつけられたのでした。

フラムさんの歴史を綴るスライドも入っていましたが、狭いスタジオ風の所に凡そ三時間ほど、立ちっぱなしには少しく疲労いたしました。

輝くお顔のフラムさんにお別れを告げたのは夜の十一時を過ぎておりました。

益々お達者の鷹山宇一先生

銀座松屋の二科展から地下鉄で、中野の鷹山宇一先生の御宅を訪ねました。

先生は、十一月にお会いした時よりも、更にお顔の艶もよく、ランプの話になるともう、身振り手振りで饒舌そのもの。まるで少年のような御様子に、こっちまで嬉しくなるのでした。

ご家族皆様の温かいおもてなしを受けて、恐縮しながらマンションを出ました。

会員登録の更新について

鷹山宇一記念美術館友の会は平成六年十一月に設立されましたが、当初より平成八年の三月末日までを初年度の活動期間と定めております。四月一日より平成八年度に入りますが、会員の皆様には引き続き会員登録を更新のうえ、美術館の事業への協力および相互学習に取り組んでいただきたいと思います。

会員の種別および会費等は以前のとおりですので、お早めに手続き下さいますようお願いいたします。

なお、更新手続きは美術館において行っておりますが、七戸郵便局に口座を開設し振り込み用紙を発行していただくことにもなりましたので、直接来館できない方はどうぞご利用ください。さらに、複数年度分を一括で納付される方には割引制度を適用いたします。詳しくは美術館にお尋ねください。

今後とも友の会ならびに美術館に対してご理解・ご協力をお願い申しあげます。

更新手続期間は前年度の一月から三月まで、四月以降は翌年の三月までが有効期間となります。

お問い合わせは美術館（62－5858）まで

鷹山宇一記念美術館
NEWS&REPORT
NO.4
平成8年4月

春季二科展開催

4月28日(日)〜6月2日(日)

昨年5月、会期中5,204人の入館者を記録し好評をいただいた『春季二科展』。本年も鷹山宇一記念美術館にやってきます。

今展のポスター、チケット、図録の表紙を飾った鷹山宇一画伯の「高原の花」(八号)

社団法人二科会が毎年三月、東京の松屋銀座(デパート)で開催している『春季二科展』は、昭和五十三年四月、秋の本展に対し「造形上の実験的創造」の場として発足されてより、本年で十九回目の開催となりました。同展は、常に新しい価値の創造を目指して、主に、二科会絵画部・彫刻部の会員による最新作の発表をしています。東北では当館だけで巡回展示され、現在、中央で活躍する二科会の先生方の作品を目の当たりに鑑賞できる絶好の展覧会です。

この度、当館で展示される作品は、平成元年、文化勲章を受章した二科会理事長・吉井淳二先生の一〇〇号の新作や、平成七年、恩賜賞・日本芸術院賞を受賞、日本芸術院会員となった織田広喜先生の五〇号の新作をはじめとする、二科会会員の先生方の絵画作品八〇余点と彫刻作品十六点。当館名誉館長・鷹山宇一先生は「高原の花」(八号)と「陽炎の季節」(三〇号)の二点を出品しています。

また、本年は二科会青森支部展を併催。青森県在住の二科会青森支部同人十三名による、五〇号から一〇〇号までの力作を展示します。

入館料は平常通り、一般五〇〇円、高大三〇〇円、小中一〇〇円。友の会会員の皆様には、それぞれの特典で入館いただけます。会期中は休まず開館いたしますので、皆様お誘い合わせのうえ是非ご来館ください。お待ちしています。

ボランティアSTAFF大募集

春季二科展開催中
つごうの良い日
一日でも何日でも何時間でも
お仕事は簡単
展示作品と鑑賞者の安全のため
美術館内の監視に当たります
そして
ｵｰﾌﾟﾆﾝｸﾞﾚｾﾌﾟｼｮﾝのお手伝い
本物の芸術に触れながら
ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動をしてみませんか
ぜひ美術館までご連絡下さい
TEL 0176-62-5858
友の会会員を始め多くの方々の
ご理解ご協力を
よろしくお願いいたします。

二　科　会

１９１４年（大正３）、新しい美術の確立を目指し、結成された在野の美術団体。当時、日本初の官設展である文展（文部省美術展覧会）において、認められない新傾向の洋画家達は、洋画部を一科＝旧派と二科＝新派とに分離するよう政府に要求したが却下。文展より離れ独自の展覧会を開催した。その自由で革新的な傾向は、現在まで脈々と受け継がれ、多くの芸術家を輩出している。１９４４年（昭和19）、解散。戦後１９４５年（昭和20）、再建。１９７９年（昭和54）、社団法人二科会となり現在に至る。毎年、会員・会友はじめ一般からの公募作品を展示する秋の本展「二科展」と、造形上の実験的創造に挑んで、主に絵画部・彫刻部の二科会会員の最新作を展示する「春季二科展」を開催している。

美術講演会 を開催しました

郷土七戸町出身の芸術家への一層の理解を深めようと開催された美術講演会。２月18日には鳥谷幡山先生について山崎栄作氏に、そして、３月10日には鷹山宇一先生との思い出を佐藤米次郎氏にお話しいただきました。両日併せて、約１００名もの大勢の方々がご来場くださり、好評のうちに終了しました。紙面の関係により、その中より一部抜粋してご紹介します。

貴重なお話と楽しい時間を提供くださいました両先生、ありがとうございました。

「画人・十和田湖紹介 鳥谷幡山」

講師　地方史研究家　山崎栄作氏

鳥谷幡山について語る山崎栄作氏

画家以前

幡山は明治九年一月に、瑞竜寺二十二世鳥谷丹堂の次男として七戸で生まれています。名は又蔵、雅号は幡山。七戸で生まれて七戸で育っているんですけれども、十歳の時父丹堂が亡くなりまして、十五才の時には、母親が野辺地の方でしたので、七戸から野辺地小学校に入っています。小学校時代より絵が好きで、今で言えば教育庁から視察に来てですね、絵をほめられて、そういうことが自分で絵を志すきっかけになったかも分かりません。また、この時代、幡山の友達たちが「十人会」を創ります。この十人会がその後、東京でいろんなことに力を発揮しますが、そのメンバーは、野辺地の有力者の子息や、その後日本画家、写真家、政治家になるような文化・芸術に造詣の深い面々です。こういう幡山の人間関係を見るならば、そういう立派な方ばかりが多いわけです。いろんなひけめを感じておったと思いますけれども、そういう人たちに負けまいとして、自分の人生をぶつけたんだと思います。そして、野辺地小学校から函館の商業学校に入学。その函館商業学校に入学していた時、東北・北海道を旅行中の青年画家・寺崎広業と出会い、弟子になります。この時幡山十九才、寺崎広業は二十八才です。広業は、祖父が秋田藩の家老を務めた家柄に生まれ、幼い頃より美術には造詣が深く、後には岡倉天心・橋本雅邦に認められ、東京美術学校（現・芸大）の助教授になっておる人で、青年を集めて「日本青年絵画協会」を創立し、門人は三百人ぐらいおったと言われています。幡山は、この時旅館に行って弟子にしてくれということをお願いするんです。まあ、お兄さんは函館で商売をやっておったんですが、随分お兄さんにお願いして、学校を辞めて寺崎広業の弟子となり、二十才の時上京します。

寺崎広業に弟子入りしてから

東京に行ってからは、寺崎広業の家で過ごします。

幡山は弟子といっても家事手伝いをしながらで、昼は雑用が非常に多いわけです。ですから、夜になってから石油ランプで勉強しております。広業に入門して間もなくから、広業が描いた下絵に全部色彩をつけて描いたり、そして、今で言えば重要文化財になるものなんかも模写して、それに全部色彩しています。その有名なものを一つとってみれば、大阪の四天王寺の扇面の模写絵を十枚ほど描いております。また、二十二才の時には、東京美術学校（現・芸大）の入学試験を受け、生きて飛び回るサルを描いております。一年生を志願したが、橋本雅邦先生は二年の資格があると言って、二年生に編入しております。この美術学校で絵を描きながら、いろんな人とつきあって行くわけです。

美術について

幡山ほど人間的に芯を貫いて生きた人はそうざらにはいないだろうなと思っています。彼はもう美術に対しては非常にうるさかったそうです。学校におった時から、美術学校なんかでは、横山大観なんかと一緒に勉強しているんですけれども、彼は美術に対する、そういう絵については非常に厳しかったそうです。展覧会の審査員もやっているんですが、彼の選んだものは誰も

何も言わないぐらい、いい絵ばかりだったそうです。これはこの間娘さんともお会いしまして、お話を聞いたらそのとおりで、大観なんかは出品された絵の、まあ「私の絵を選んでくれ」というような下心のある人の絵をみんな採ってしまう。幡山はそんなのはみんな嫌っていました。ですから、絵に対することには、彼はそういう点でいろんな所から反撃されたということです。

十和田湖について

幡山は十和田湖を非常に紹介したということで有名です。十和田湖は今、国立公園になってから六十年近くなるんですけれども、まあ、その影になったのは彼です。この人がいなければ、これがずっと後になったことと思います。まあ、彼ほど十和田湖を、日本また外国に対して紹介した人は、県内にはいないだろうと思っています。明治二十八年四月、広業に弟子入りし上京するんですけれども、五月に徴兵制で検査があったために帰郷します。その六月に十和田湖に初めて行っていますが、当時、十和田湖に行くには一人で行けないような状態で、まあ、大変なんです。行くにも道路がないし、道路があってもただ人が歩くだけの道しかない。木が転んでる、道も藪を越えていっています。今の道路とは全然違うんです。幡山が行った時の道は、十和田湖町の沢田の方から山伝いに、今の渓流でなくて山伝いに行って、渓流に下がるというコースです。彼が二十才の時です。そして二十一才の時、「日本青年絵画協会展覧会」に初めて十和田湖の絵を出品する。これが十和田湖を絵にして世に発表した、日本では初めての絵ではないだろうかと思います。

また、当時東京付近にいる人たちで「奥南郷友会」というものがありまして、これに初めて出席した幡山は、五戸生まれの鳥谷部春汀と知り合い、十和田湖を世に出すことを誓い合っています。幡山が三十二才の時です。春汀は皆さんご存じのように「太陽」という雑誌を発行しておりました。政治家であった春汀は、文章のこと、美術的なこととか、そういうものは分からないから、文豪・大町桂月に頼むということで、桂月が十和田湖に来るわけです。そして、それが紀行文として「太陽」に載ったわけです。まあ、そのようにして、十和田湖というのが紹介され、皆さんにどんどん知られて行くわけです。その他、彼は四十七才の時、「十和田勝景画譜」という画帖を、そしてその後に「十和田湖大観」というものを出版しています。このような本は幡山が自費出版したものです。大正四年ですよ。中身は全部十和田湖です。当時、相当金がかかったと思います。全部写真なんですからね。

だいたい彼の描いた絵の三分の二ほどは十和田湖であると言えますけれども、それだけ郷土の十和田湖・渓流を愛し、誇りを持っていました。そういう十和田湖にかける「情熱」について、皆さんに見ていただきたいなあと思います。

おしまいに

幡山は、昭和四十一年に九十一才で亡くなっておりますが、絵にしろ、十和田湖を紹介するにしろ、そういういろいろなものに、幡山は自分を打ち込んでやったということです。今、郷土の一人として研究してみて、こういう人が青森県にいたということを非常に誇りに思っています。

これから、ここら辺の埋もれた人たちを、やっぱり私は一人の語り手として、掘り起こし、蓄積していければなあと思っています。

山崎栄作氏

十和田市在住の地方史研究家。中学卒業後、大工さんへ弟子入りしながら県立野辺地高校を通信教育で学び、その後、働きながら大阪の修成建設専門学校を卒業。6年の大阪生活後、帰郷。その頃、十和田市の苫米地繁雄氏主催の「南部地方史研究会」創設に参会。

現在、山崎ブロック代表を務め、大工さんの仕事の余暇には好きな地方史の研究に全精力を費やす篤学の人である。『蝦夷日記』等今日までに6冊の史料を自費出版している。

「鷹山宇一との思い出」

講師　版画家　佐藤米次郎氏

鷹山先生そして七戸町との縁は

ちょうど、(旧制)青森中学校を十七才で卒業した夏、この七戸町へ来ました。私に青森県蚕糸加工教師という辞令が出たんであります。その辞令で蚕業取締所ってありまして、そこに約二年半ばかり務めておりました。

さて、鷹山先生のお名前は、中学校の大先輩で、しかも私は中学校時代にもうすでに版画の本を発行しておったんですよ。その版画の本を鷹山先生にも寄贈しておって、ご覧に入れておりました。それで、七戸におった時分は、鷹山先生の家と私の下宿の家は、五十メートルも離れていないようでして、随分親しくさせていただきました。

当時、上北新聞社というものがありました。その上北新聞社の社長さんがね、大の鷹山さんのファンでして、その新聞に私らも良く作品を掲載したものです。とにかく七戸という所は、非常に風景になる所が多いんです。それで、私が一番最初に東京の展覧会に入選したのは、そこの膝森牧場というまきばの風景です。その風景を写生するとき、こちらに桃太郎屋さんというところがありましてね、そこのご主人も、大の鷹山さんファンで、日曜といえばね、鷹山さんのために車を出してくれるんですよ。そして、膝森牧場に行くんですね。すると、鷹山さんはもっぱら膝森牧場の花、ボタンだとかね、いろんなきれいな花を描いて、後に、当時劇場がありましたね、七戸劇場ですか、その劇場で個展を開きました。私は、その膝森牧場の、あの付近何といいましたかな、名前は忘れましたけれども、非常に洒落たね、住宅があったんですよ。そこの住宅を版画に彫りまして、それを出品して入選したのが、第一回目でしたね。

鷹山先生について

私の友人の関野準一郎君

鷹山宇一先生永年のコレクション「ランプ」。展示替えしました。皆様のお越しをお待ちしています。

の出した本の中に、鷹山先生のことを書いてあるんですよ。どんなことを書いてあるかと言えば、「鷹山宇一先生の画廊に行くと、畳を二枚立てて、仕事をしている所を誰にも見せない。」というようなことを書いてあるんですよ。それは全然嘘ですね。この本を出した時、私は関野君に言いました。「鷹山さんという人はそんなケチくさい方じゃないよ。非常に大らかな人で、何でも教えてくれる人ですよ」ということを教えてやりました。事実私は、鷹山さんからいろいろなことを習いました。それで、何をしているかと言えば、仕事場が二階ですから、二枚に畳を寄せて、その寄せた一坪の所に大きいたらいを上げて、それに水をいっぱい汲んでいるんですよ。版画というのは、筆を洗ったり、色をとばしたりするために水が非常に必要なんですよ。その水を必要とするために、たらいを置くための畳を寄せてるわけですね。鷹山さんというのは非常に親切で、自分の彫るところをよく見せてくれます。「こういう時はこういう彫り方をするんだよ」とかね。私はそれをいいことに何回もお邪魔するわけですね。

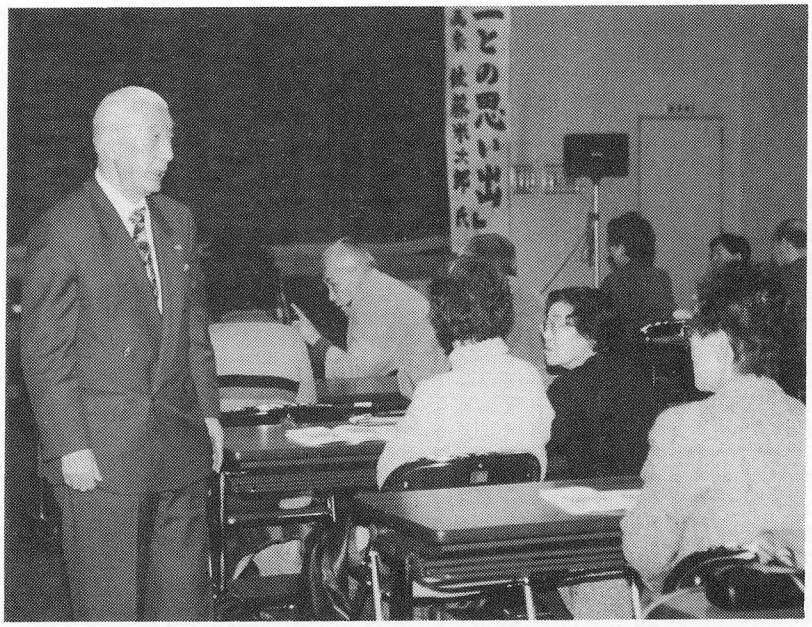
鷹山宇一さんという方は、東京に行かれても非常に細かい仕事をする人なんで、私が東奥日報社に入社した時、ちょうど、支那事変、満州事変が起こった時で、よく地図なんかを新聞に描かされるんですね。その地図を描くのに、どういうペンで、どういう風な描き方がいいのかしらということをね、聞きに行ったものですよ。するとね、懇切丁寧に教えてくれるんですね。私はそれを見習って相当細かい仕事を描いて、私の仕事の役に立ったことを覚えています。だから、決して関野さんが書くように、人に隠れて絵をするとか、なんとかという、そういうケチくさい人ではありません。それで私は非常に鷹山さんを尊敬しております。

芸術・絵について

鷹山さんの版画は作風が非常に分かりませんね。分からない。棟方志功さんだって分かりませんね。分からないものを描けばいいのかというと、それでも困りますね。芸術というのはね、どこがいいのかしらと私も実は分からないんですよ。ある時ね、棟方チヤ夫人にね、先生の絵指さしてね、「何処がいいんですか」って聞いたことがあるんですよ。そしたらね、「分からないよ」って、「自分でも分からない」って、「お父さんも分からないでしょ」って言うんですね。それくらいね、芸術の道って難しいわけ。

中国のね、画廊にね、絵描きさんにね、大変いい教えがあるんですよ。それはどういうことかと言えばね、とにかく絵はうんと描けと、描く時はね、うんと真似して描いてもいいって言うんですよ。真似して描いてもいいし、どんな人の絵でも、描いたらそれを良く覚えておきなさいと。悪い人の絵を真似したらダメだよとね。それから、その絵をね、人が見てね、だれの絵を真似したかすぐ分かるような絵を描いてもダメなんだよとね。たった二字で、こう言われているんですよ。「重品」。品格を重んずる。描いた人の品格を重んずるとあるんですよ。

それから、鷹山さんの絵。この絵はね真似できませんよ。それから関野さんの版画、これもね、ちょっと真似できないんだ。それから、棟方志功さんの版画、これがねえ、真似できるようでできない。いいですか。これね、一番真似しやすいようで、できないんですよ。というのは、刷るので分かる。刷り方で。鷹山さんもね、刷り方で分かる。凄い刷りですよ、鷹山さんの版画というのは。そして、鷹山先生の油絵はとにかくきれいですね。すばらしいですね。鷹山さんのいわゆるタッチというのは凄い。あんなにきれいにね、絵を鮮やかに描ける人というのはそうはおりませんよ。鷹山さんと言ったらね、今、日本の洋画ではねトップですよ。トップ。ですからね、洋画を描くんだったら、鷹山宇一さんに憧れているべきですね。



鷹山宇一先生との思い出を語る佐藤米次郎氏

おしまいに
講演中印象に残った佐藤先生のこの一言

これ一点をね、ポケットに入れておるだけでも誇りですね。（友の会会員証を手に持って・・・）

佐藤米次郎氏

青森市在住の版画家。蔵書票等版画運動の他、童話運動に参加。その功績により第１回青森市文化功労者賞はじめ、第22回青森県文化賞、昭和58年には青森県褒章を受賞するなどその他各賞を受賞。また、平成７年度春の叙勲では菊紋木杯一組台付を賜杯。昭和38年植樹祭で御来県の天皇・皇后両陛下に「みちのく子供の四季」他６点が献上されている。

現在、日本美術家連盟会員、日本板画院名誉会員、財団法人棟方志功記念館理事等を務め、芸術文化活動に幅広く活躍されている。

当館の正式名称は「鷹山宇一記念美術館」です。内外の多くの方々のご協力によりここには六十数点にのぼる鷹山画伯の作品が収蔵されております。
さて、私たちの美術館にはその他にも注目すべき特徴や数多くの美術品があります。
これまでにも会報の紙面を借りて、ご来館の皆様にご記憶いただきたい事柄について特集をしてまいりましたが、今回はランプ館の特徴ある天井を飾るステンドグラスについて、当館との不思議なご縁に触れながらまとめていただきました。

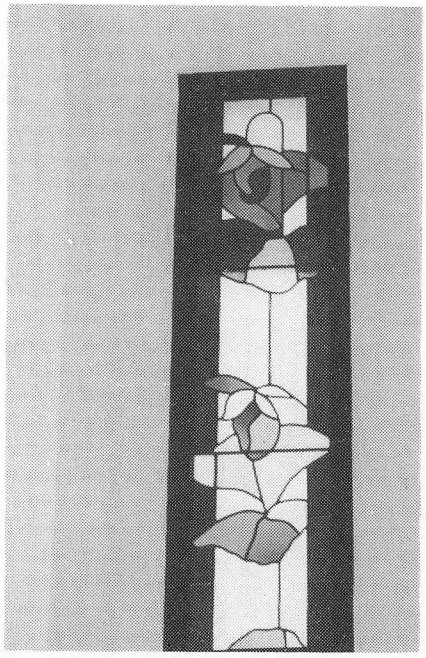
第2特集 美術館には何がある？

池内康さんを想う

ステンド・グラスの光芒

あぜりあ苑園長
戸館昭吉

七戸町では、鷹山宇一記念美術館の建設を機に、美術作品としての本格的なステンド・グラスを私達の手中にすることとなりました。
円形のランプ館の高窓の外周にあるステンド・グラスからの光芒は、四季それぞれに絶妙な色彩の競演となり、朝の日ざしから、夕べの残照に至るまでの一巡をする間にも、鷹山先生が心血を注いだ、十九世紀末ヨーロッパ・ランプコレクションの冷たいガラスに輝き、更には堅いコンクリートの列柱に映えることとなって、観る物にしばし至福のひとときを恵むこととなるのです。
このステンド・グラスの製作者は、池内康さんです。
池内さんは、北大を出られた武夫氏と成さんの長女として、一九四三年に東京で誕生しました。武夫氏は、農林省に入省間もなく、七戸町・奥羽種畜牧場（現在の家畜改良センター奥羽牧場）に赴任。七戸町で新婚時代を過ごし成さんが康さんを身篭もったまま本省へ帰任することとなったときます。
長じて東京芸術大学へ進むこととなるが、大学院の頃はフレスコ画にひかれておられたとのこと。
池内さんは、芸大のマドンナと言われた程の才媛で、世田谷の御自宅で拝見した写真は、あたたかく、春の陽光のようなお人柄を現しておりました。
平山郁夫先生と、横浜国際会議場の壁画としてのステンド・グラスを制作中の写真は、既に病魔に冒されているので、残念ながら、かなり痩身であったが、それでも精気あふるる感じのするものばかりでありました。



鷹山美術館のステンド・グラスは二科会の鷹山ひばりさんから、彫刻家の吉野毅先生（鷹山宇一美術館理事）に相談され、先生の御推奨で池内さんに依頼することとなったものです。お二人は芸大のクラスメートであり長く知遇の間でした。
一九九四年八月一日、美術館はいよいよオープニング・セレモニーの日をむかえることとなりました。
暑い夏の日ざしも、ようやく傾く頃、鷹山先生のランプコレクションを展示するランプ館の列柱にもたれる一人の御婦人が居られました。
小さな写真の額をお持ちで、気品ある御様子から、池内さんの御母様ではないかと思い、声をかけましたら正しくそのとおりで、七戸を去って数十年ぶりで訪れたこと。奥羽牧場の一角に美術館が出来て娘の作品が納められることとなったことの喜び。幾星霜の年月を経て変わらぬ八甲田山の山々のこと。この地を去る秋に、娘を身篭もっておられたこと。ご主人との夢のような幸せの日々であったこと。等について、もの静かに、しっとりと語られました。
康さんは、その年の六月十六日、五十才の短い生涯をとじられており、勿論オープニングに来町できませんでした。御母様とは、私にとって、たった一度だけの短い出会いでありましたが、よもや、その年の十一月二十二日、わずか一日の入院で康さんの後を追うかのように、世を去ることになろうとは全く想いもよらないことで、もっと多くのことを伺っておくべきであったと悔やまれてなりません。
池内さんの絶筆となったのは、名古屋の中京競馬場のホールの「風」という大作です。
この作品は、臨終の日に、病床で、御母様からのたっての依頼を受けた山田修一氏が引き継いで、康さんの下絵をもとに、完成させたものです。
池内さんの御父様が戦後の中央競馬会の創設に参画し、晩年には常務理事で退任されたこと。康さんが多くの馬の絵を画き、数々の大作を競馬場に残されたこと。等々に、想いをめぐらすとき、目に見えないえにしによって、池内さんとこの地が深く結ばれしものがあると思うのです。
池内さんの作品のいくつかにふれて想うことは、最初の絵の原画と、ステンド・グラスの原画とは、二つの異なる作品といってもよい程のもので、ステンド・グラスには、朝と、昼の光の状況で、作品が全く別のものとなり、ガラスを透過する妖しい光のあやなす色彩は、汲めどもつきせぬものがあります。
実弟の浩氏御夫妻の御理解をいただいて、ランプ館の作品の原画を美術館にいただくことや、将来遺作展を開くことが出来ないか等々、多くのことを語り、水彩画・ステンドグラスの小品・沢山の下絵の飾られた世田谷のお住まいを辞することとなりました。

池内さんは、ステンド・グラスに魅せられ、病床にあっても下絵を画き続け次々と、構想を練る毎日でしたが、九四年六月十六日、あふれるような才能を全開することのないまま御母様にいだかれて旅立つこととなりました。

私達の心残りは池内さんが美術館のランプ館に完成した作品を遂に一度も目にすることがなかったことです。

札幌新駅のステンド・グラス「黎明」には「原画・国松登」とサインがあります。横浜・みなと未来の国際会議場には、大作「星座・94横浜」があり「原画・平山郁夫」とサインがあります。

池内さんが、自分のオリジナルでないステンド・グラスの作品を創ったのはこの二点のみとのことですが、先にもふれたように、ステンドの原画と、最初の作者の原画とは全くべつのものといってよい程で、二人の共作として、サインはやはり二人であるべきと思うのですが、どうであろう。いつの日か専門家にきいてみたいものと思うのです。

まだ肌寒い三月の或日、国立横浜国際会議場へ足を運ぶ。

札幌も、横浜も、多くの人が訪れ、その頭上に圧倒的な存在感のある作品があるのであるが、若くして去った才能ある作家の渾身のエネルギーが私達の体内に注入される想いがするのです。

特に池内さんが直接手をそめる最後の作品となった横浜国際会議場の壁面を彩るステンド・グラス「星座・94横浜」のラピスラズリを思わせる瑠璃色の輝きは、池内さんのすばらしい感性のたまもので、世俗の心を洗う紺碧の世界へいざなうこととなります。

過日、池内さんの作品の製作に力を盡された湯河原のクレアーレ工房を訪問。工房の福井さん、江口さんの実演によって、参考書では、どうしても判らなかったことがいともたやすく理解できたことは大きな収穫であった。

工房には、一般の工房とは比較にならない程の各種の色ガラスのストックがあり、池内さんが、特に好んで多用されたドイツの製品で、全体に渋い、抑制のきいた色ガラスの数々を手にすることが出来て、改めて、鷹山美術館のステンド・グラスの品格のすばらしいことに理解を深めることが出来ました。素材から全く異なるのです。

作品は不滅です。

鷹山宇一記念美術館に池内康さんの作品をいただいたことは単に花を添えるという意味を越えて、それ自体高く評価できる作品を得ることが出来たという意味で、本当に幸せであったと申す他はないと思うのです。

ステンド・グラスについてなにも判らない方でも、鷹山宇一記念美術館で池内さんの作品に接することとなれば、忽ちにして、その魅力の虜となり、私の妄言など全く必要なきこととなります。

皆様の御来駕を切望して筆をおくことと致します。

（美術館理事）

池内　康（本名：池内康子）略歴

1966年　東京芸術大学油画科卒業
1968年　東京芸術大学大学院壁画科修了
1968~76年　新樹会展
1968~72年　東京芸術大学壁画科研究副手
1970年　壁画４人展（ﾌﾚｽｺ）
1972~78年　東京芸術大学壁画科
　　ｽﾃﾝﾄﾞｸﾞﾗｽ集中講義非常勤講師
1973年　ﾍﾞﾙｷﾞｰｾﾝﾄﾙｰｶｽ美術大学ﾓﾆｭﾒﾝﾄ科編入
1973~76年　壁画グループ展（ｽﾃﾝﾄﾞｸﾞﾗｽ）
1974年　個展（水彩・ｽﾃﾝﾄﾞｸﾞﾗｽ）
1976~77年　ＹＭＣＡ絵画彫刻展
1978年　個展（油彩・水彩）
1979年　第1回日本ｽﾃﾝﾄﾞｸﾞﾗｽﾃﾞｻﾞｲﾝｺﾝｸｰﾙ銀賞
1982年　有形展（油彩）
1984年　個展（油彩・水彩・ｽﾃﾝﾄﾞｸﾞﾗｽ）
1985年　個展ﾙﾐﾈｽｸｴｱｳｰﾏﾝｸﾘｴｰﾀｰｽﾞ
　　（水彩・ｽﾃﾝﾄﾞｸﾞﾗｽ）
　　有形展（油彩）
　　中央工学校集中講義
　　女子美術短期大学集中講義
1986~94年　多摩美術大学油画科
　　集中講義特別講師
　　有形展
1987年　中央工学校集中講義
1991年　東京文化学院特別講義
1994年　鷹山宇一記念美術館（ｽﾃﾝﾄﾞｸﾞﾗｽ）
1994年6月17日　　永　眠

美術館でお茶会を開催

平成８年５月１２日

私たちは地域社会に茶道を広げるため、十和田地区を中心に活動している団体です。

最近では、名久井焼の窯元へ行き茶碗作りを体験したり、デパートでのお茶会を開くなどお茶に関する行事を数々行ってきました。

しかし、常日頃から茶道といいますと、堅苦しいイメージがあり、機会がなくてはなかなか目の当たりにすることができないというのが現状のようです。そしてまた、人口の減少、習い事の豊富さが人々の集まりを分散し、茶道に限らずいろいろな物事に挑戦、又は体験しようとしても難しい状況におかれていると思います。

そこで今回、美術館の皆様のご理解、ご協力の下に県外・海外からの多数のお客様がいらっしゃる二科展の季節にスポットをあて、美術館の庭をお借りいたしましてお茶会を開くことを企画いたしました。

より多くの方々に茶道への第一歩を踏み入れてもらうため、次のような計画を立てました。

① 立礼棚を使い野点にする。
② 募金箱を設置する。
③ または、受付を作る。
④ ¥１００を入れてもらう。（美術館のコーヒー¥１００と同じ料金にしました）
椅子に座り、お菓子と抹茶を賞味してもらう。

普段、抵抗のあるお茶会であっても、このような気軽なお茶会を通して抹茶の味や心落ち着く雰囲気を実感していただければ私たちの幸いに存じます。一碗から人と人の結びつきが深まるような、そんなお茶会に仕上げることができれば私たちの企画も成功したと言えることでしょう。また、今回を機に、一人でも多くの人が茶道というものに関心をよせどこかでお茶会がある時は楽な気持ちで足を運んでいただければうれしく思います。

茶道裏千家淡交会
十和田青年部
副部長　沢村　千晴